

日本臨床歯科学会 大阪支部 技工支部会 Web 開催報告  
2020.12.5 (会場: オービック)

2020年12月5日(土曜日) web 開催にて日本臨床歯科学会 大阪支部技工士部会が開催され、2名の会員技工士による発表が行われた。



① 『コミュニケーションにより歯と口唇の調和を目指した審美修復症例』

D T. 山田 修平 (スター歯科)

歯のサイズ、形などかなり審美的要求が高い患者に対しての上顎前歯部修復において診断用ワックスアップのみならずデジタル技術を活用することにより患者に視覚的に治療ゴールのイメージを提示し、患者・ドクター・テクニシャン間での良好なコミュニケーションのもとプロビジョナルレストレーションから最終補綴装置装着までの工程、各ステージでのチェックポイントを供覧しながらの発表であった。

演題にある歯と口唇の調和も達成されており審美修復治療としての完成度は高く素晴らしい症例であった。そして術前シュミレーションにより治療ゴールのイメージを提示しそれを具現化していく治療技術により患者満足度も非常に高いと思わせる症例であった。



② 『咬合再構成における顔貌と正中線の設定』

D T. 金森 康史 (西村歯科)

咬合再構成において顎位の決定後、最も重要となり審美的咬合平面のスタートラインとなる上顎中切歯の3次元的位置の設定において、顔貌および口唇からみた正中線に着目し焦点を当てた発表であった。

2つの症例提示において、第1症例は顔貌正中と正中歯間乳頭の位置が大きく差があるケース、第2症例においては、顔貌そのものが左右非対称で瞳孔線、鼻下点、オトガイなどの水平・垂直基準線の設定が難しいケースであった。いずれも歯の正中線の設定に苦慮した症例で、V. Kokichiの研究、文献を参考に顔貌・口唇と歯の正中のズレの許容範囲を演者の視点から模索し、自身が手掛けた症例に照らし合わせながらひとつの指標を示す素晴らしい発表であった。両ケースともに正中線の設定に苦慮したケースであった様であるが、顔貌・口唇との調和が得られた最終補綴装置に仕上がっていた。



両氏の発表を通して参加者と共に臨床体感ができ、米澤 大地先生（大阪支部長）、木原敏裕先生（大阪支部相談役）にもコメント、アドバイスをいただき会員技工士にとって有意義な会になった。



日本臨床歯科学会大阪支部  
日本臨床歯科学会大阪支部

技工士部会執行部  
技工士部会統括理事

川端 誠一  
藤本 光治